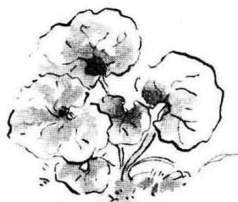


風雲 祖谷のかずら橋

原田一美





NDC913

原田 一美

風雲祖谷のかずら橋

原田一美作 金成泰三絵

国土社 1985

215p 22cm (現代の文学・7)

ふうんいやくのかずらばし <現代の文学・7>

1985年10月5日初版1刷印刷

1985年10月10日初版1刷発行

著 者 原 田 一 美

発行者 長 宗 泰 造

発行所 株式会社 国 土 社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

印刷所 株式会社 厚 徳 社

©原田一美／金成泰三

ISBN4-337-20507-1 C8391

ふう うん
風雲
い や ば し
祖谷のかずら橋

原田一美



金成泰三・絵



国土社



もくじ

1 アオバズクが鳴いた 5

2 かわいげなやく病神 31

3 山刀と銘刀と 49

4 恵十郎の道 66

5 般若のたくらみ 86

6 万人講の重さ 102

7 左門庵の人びと 120

8 花笠と踊り太鼓 132

9 木地屋談合 148

10 祖谷の振り米 165

11 橋をかけよう 178



12 戦いのとき

あとがき

213

193



著者・原田一美

一九二六年、徳島県に生まれる。徳島師範本科卒。現在徳島市富田小学校長。徳島ペンクラブ会員。主な作品に『ホタルの歌』（学研児童ノンフィクション文学賞）『出会いがあつて』（石森延男児童文学賞）『ドイツさん物語』など多数ある。

住所／徳島県麻植郡山川町字川東九八一

画家・金成泰三

一九四六年、愛媛県に生まれる。広告代理店勤務を経たのち、現在フリー。大人向けの雑誌や新聞のさし絵、ポスターなどは広くこなし、目下、児童書のさし絵や、自然をテーマとした創作絵本に意欲をもちしている。

住所／東京都保谷市ひばりが丘二一十三一

アオバズクが鳴いた

(1)



阿波の国(徳島県)を背骨のように、東から西へ連なる四国山地、そのほぼ中央を横切る落合峠の山道は、細く長く山肌をぬってつづいていました。

人ひとりが、やっと通れる道の両側は、一面のクマザサにおおわれ、ところどころ立ち枯れになったブナやモミの木が、白い骨のようにつつ立っています。

(あいつ、山は知らないな)

彦丸は、二十間(約三十六メートル)ほどききを、あぶなっかしげな足どりで歩いているかんじん(こじき)姿の男の背をみやりながら、つぶやきました。手早くわらじのひもをしめ、ななめに背おったふろしきづつみの重みを両手でたしかめると、しっかりと、むすびなおしました。

中には、今朝がた、ふもとの半田村の木地問屋、敷地屋の店で、木地盆五十枚と引きかえに受

けとったはがね（鋼鉄）の棒が五本、油紙につつまれています。

「はがねははがねでも、玉はがねぞよ」

と、父の一貫斎が、とくに念をおして取りよせてもらったものです。

それを打って作るロクロノミは、木地屋にとっては命のつぎにたいせつな道具です。まして一貫斎は、阿波の木地屋七十三戸の頭領です。その跡継ぎ息子の彦丸に、はじめてあたえるノミです。父として頭領として、恥ずかしい物にしようと思ひこんでいます。

「十五、十五歳の春は、一人前の木地屋だ」

おさえてもおさえても、こみあげてくる喜びに、ワツと大声をあげ、一もくさんにかけてつづけ一刻も早く父の小屋へかけこみたいのに……。

今はそれどころではありません。

みえがぐれに、さきを行く男の影をみうしなわないように、そして、つけていることを気取られないように、足音をかくすことで精いっぱいでした。

気にかかる男――。

その男をみかけたのは、半田村の古着屋の店さきでした。

「おい、太布の着物はないか、それも、ぼろほどありがたいのだが」

気がめいるようにしずんだ声に、通りすがりの彦丸は、思わず足がとまりました。

太布たふというのは、木の皮の織維せんいで織おった布です。ごわごわした肌はだざわりで、木綿もめんの着物も買えない山奥やまおくの木こりや、貧しい百姓ひやくしやうの仕事着につかわれていました。

それも、ぼろほいいいとはおかしなことをいう男だなど、彦丸ひこまるはついきき耳を立て、店をのぞきこみました。

年は三十前後でしょうか、ならべられた古着にそそぐどん欲よくそうな目、やせた肩口かたくち、くぼんだほほ。まるで飢うえた山犬のようなやつだなど、彦丸ひこまるは思いました。

「高い。二十文もんにまけろ」

「でもなあお客さん、これはまだ二、三どしか水をくぐらせてないもんじやで……」

「だから二十文で上等じゃ。太布たふは洗あらうほど目めがつんでようなる。またやわらこうなる。わしのほしいのは、そんな古着じゃ。こんなものは、二十文でも高いくらいじゃ」

そういいながら、ふところから二つ折りの革かわざいふをだし、主人の返事もきかず、たたみの上にびた銭いちもんせん（一文銭）を投げだしました。

「へえー、ごりっぱなお持ち物で」

主人は銭ぜにを数えるのもわすれて、そのさいふと、はしにゆれている根付け細工ねつけざいくのみごときに目をみはりました。

シカ皮の表にうるしで描えがかれたブドウのもよう、これはきっと、甲州こうしゆう（甲斐かいの別称べつしやう）今の山梨やまなし

県いんでんがわの印伝革いんでんがわのさいふだなと彦丸ひこまるは思いました。根付けねつけは真まつ赤あかな般若はんにやの面おもてです。しつとりとした深ふかみのある色いろは、土佐とさ（高知県）の海うみでとれるというサンゴの、大玉おおいだまをきざんだものにちがいありません。

ぐっとつきでた二本にほんのつもの、耳みみまでさけた大きな口くち、その口からはみだしている牙きばの鋭すどさ。ただでさえおそろしい形相ぎやうそうの般若はんにやなのに、それが真まつ赤あかときているのですから、身みぶるいがしそうな気味きみ悪わるさです。

のぞき見のぞきみしている彦丸ひこまるの背せすじに悪寒おかんが走はしりました。男おとこは古着こちゃくをかかえ、そそくさと人ひとごみの中なかへ消きえました。

（どうも合点がてんがいかなぬぞ。おうへいな口のきき方はさむらいなのに、身みごしらえは百姓ひやくしやうだった。だいいち、二十文にじふもんぐらいのはした金をだすのは、きんちやくの袋ふくろがふつうだ。それなのにあのさいふ、買った物ものが太布たふの古着こちゃくとは、何なんから何なんまでちぐはぐじゃないか）

その男おとこに、古見こみの村むらはずれでまた会あったのです。

陽ひが明るいうちに峠とうげを越こそうと、いそぐ彦丸ひこまるの鼻はなのさきを、ほうかむりで顔かほをつつんだあの古着こちゃくが、歩あるいているではありませんか。彦丸ひこまるは、見みまちがいではないかと、何なんどかたしかめなおしました。

少し曲まがった背せ中なか、腰こしを落おとし、ひよこひよこことびっこをひくような歩あるき方は、あの男おとこにまち

がいありません。それに何より、あのまだらにはげた藍染めの太布の着物は、そこらにいくつものころがっている品ではありません。

（いよいよあやしいぞ。うまく化けたつもりだろうが、この彦丸さまの目はごまかせないぞ）

この道をたどれば落合峠、あとは祖谷の里への一すじ道です。

祖谷の里へ入るのに、なんでわざわざ身なりをかえなければならぬのだろう。彦丸の胸に、

疑問と好奇心が頭をもたげました。

峠は、背たけほどもあるススキの原が、尾根をわたる風とたわむれていました。風が穂をなぶ

れば、穂は身をよじつてくすぐったそうな声をたてています。

陽がしずんでいきます。

祖谷では秋の入り日をへじい殺しとよんでいました。はやい日のしずみ方に、家路をいそぐ

老人の足がまにあわず、闇にのまれて死んでしまうことがあるからです。

へじい殺しの陽を浴びて、まむかいに三嶺がそびえたっています。

標高一八九三メートルの全身で残照を受けとめ、真つ赤に燃えていました。そして、赤から

青、青から紫に山肌をかえながら、夜のとばりにしずんでいくひぎ下の山やまと、その山あい

しがみついている小さな村むらをみおろしていました。

下るにつれて、クマザサの背が高くなり、葉を落としたダケカンバや、鈴のような赤い実をま

ぶしたナナカマドの木が、背をのばしていました。

さきに行く男は、あいかわらず不器用な足どりですが、下り坂になってからは、きゆうに速度が早くなりました。

（ばかなやつ、下り道こそゆっくり歩かにやいかんのに。そうらみろ、またころんだじゃないか）彦丸がクスツと笑ったときでした。

いきなりうしろのクマザサの中から、

「ホ、ホウ。ホホ、ホウ」

と、アオバズクの鳴き声がしました。

と同時に、さきに行く男の足が、ピタツととまりました。

「あ」

ふりむいた彦丸の目に、稲妻にも似た鋭い一すじの光が、つきささるように飛んできました。

一瞬、彦丸はムササビのように、力いっぱい斜面をけりました。その背に、鋭い刀の切っ先が

流星のように落ち、玉はがねの棒にあたつて、火花を散らしました。

「しまった」

クマザサをかきわけて姿をみせたのは、行者姿の男でした。くやしそくに、彦丸が消えた斜面をのぞきこみました。



「左門、面目ねえ。まさかこんな奥山に、つけ馬がついてきていようとは……」

「ああ、馬は馬でも、まだたてがみも生えそろわねえ子馬だぜ、又兵衛さん」

「なに小僧だつて」

又兵衛はうすぎたない手ぬぐいで、首の汗をふきながら、腹ばいになって斜面の下をのぞきこみました。

「ああ、十四、五のガキだが、そんじよそらのガキじゃねえ。この左門さまの一の太刀をかわしやがったんだから」

「とすると、まさか祖谷の手の者が、おれたちの探索に気づいて……」

又兵衛の顔色がかわりました。

左門はそれに答えようともせず、刃こぼれのした切っ先を、くやしげににらみつけました。又兵衛がふつとつぶやきました。

「一足さきにとあわてたのが、悪かったか」

「そうよ、抜けがけは御法度のはずじやなかったかい」

左門はうすら笑いで、又兵衛の金つぽ眼をのぞきこみました。

「いや、そのなんだ、おれはただ……」

うろたえる又兵衛に、左門は大きく笑いながら、

「まさかとは思うがな、ま、氣いつけるにこしたことはない。ましておまえさんは面をみられてるんだ。そのなりも知られてるんだ。大手をふって歩けないことは、よくわかったはず。は、はっはっは」

たしかに左門のいうとおりです。

乱波者（スパイ）が、乱波者と正体をみやぶられたのでは、おしまいです。足をふみいれたばかりの祖谷探索の第一日に、とんだしくじりをしたものです。

がつくりすわりこんでいる又兵衛に、左門が手をさししました。

「できたことだ。いまさらくやんだってしかたがねえ。ぐずぐずしていると、こっちの命があぶないぜ。じい殺しの秋の日だ。さ、はよう」

氣をとりなおした又兵衛は、その目とこけたほを手ぬぐいでかくし、がにまたをひろげ、ひよこひよこ歩きだしました。その姿は、生まれながらの貧しい百姓、いいえ、かんじんそのものでした。

左門は、いかにも法力くらべる者もない、行者になりすましていました。彦丸に切りつけた刀は、もとどおり錫杖になり、シヤラン、シヤランと金輪をひびかせていました。

落合峠から三里半（一里〓約三・九キロメートル）、祖谷の里への尾根づたいの道は、夜露が光っていました。夜露はふたりのわらじをぬらし、足音を、いっそうひそやかなものにしていました。

(2)

寒峰^{かんぼう}が、南の斜面^{しゃめん}に折りたたんだ一枚^{まい}のひだのすきまを、ぬうようにして落ちている九十九谷^{つくも}は、深い霧^{きり}の海の底^せに眠^{ねむ}っていました。

霧^{きり}は瀬音^{せおと}をつつみ、濃^こく薄^{うす}く、息づくように流れていました。

一貫斎^{いつかんさい}は、明かりとりの小窓^{こまど}から、その霧^{きり}をみていました。

すぐ前のケヤキの太木^{おき}が、白くにじんだ太い幹^{みき}だけみせて、ぼんやり浮^ういています。その奥^{おく}から、寝^ねばけたアオバズクの鳴き声^{こゑ}と羽音^{はおと}がきこえてきます。

「おまえさま、もうおやすみなさねましては」

サメ皮^{さめかわ}で木地盆^{きじぼん}を磨^{みが}いていた妻^{つま}の山路^{やまじ}が、声をかけました。

「ううむ」

もう一ど霧^{きり}の奥^{おく}をたしかめた一貫斎^{いつかんさい}は、いろりに木地のけずりくずを一つかみ、くべそえました。パツと大きく上がった炎^{ほのお}が、ふたりの影^{かげ}を杉皮^{すぎかわ}の壁^{かべ}にうつしました。

「村がおもしろうて、遊びほうけていたにちがいありません。いいえ、もしかしたら、石の小屋^{いしのおや}のじいさまあたりで、泊^とめてもらっているのかも……」

「ならばそうつけていくはず」

父の許しを得ないで、そんなことをする彦丸ではないことを、一貫斎が一ばんよく知っていました。

「いいえ先日、子ジカがとれたからみにこいと、彦丸に申されていました。きっと、道のついでにまわったにちがいありません。しっかりとしているようでも、まだまだ子ども」

山路は恵十郎じいの細い目と、白くて長いあごひげを思いうかべていました。そのひげをおもちゃにして大きくなった彦丸です。きっと今夜はそのひげをいじりながら、じいがわたってきた信州（長野県）、紀州（和歌山県）の山やまでのくらしや、昔話をねだっているにちがいありません。

山路はそんなふたりを想像して、フツツと小さく笑いしました。

「何がおかしい。おまえのいうように、もし石の小屋で泊まっているなら、じいのことじゃ、きっと何かのつなぎ（連絡）をしてくるはずではないか」

「ええ、きつとなされたにちがいませぬ。でもこの深い霧ゆえ、火振りのつなぎ（たいまつ）の合図）もとどくはずはございませぬ」

石の小屋はこの九十九谷から、二里ほど北の、矢筈山の北斜面の中腹にあります。晴れた日なら、のろしの煙も火振りの合図も手にとるようにみえる距離です。